『アウフ』第２集　あとがき

ライブドア問題を考える

田 中　史 郎

本号は第２集になる。小生にとって第２回目の卒業生を世に出す。普通ならば、ためらいもなく祝福するところだが、就職難の状況を見るにつけ、複雑な気持ちになる。

かつて小生が大学を卒業した 70 年代では、今日ほど物質的な豊かさはないものの、今日のような閉塞感は無かった。確かに、高度経済成長は過去のものとなっていた。とはいえその結果として一定の豊かさは確保でき、また、低成長といえども今日と比べれば成長率は高く、失業問題も深刻ではなかった。

それに対してバブル崩壊以降のこの越世紀不況は、フリーターやニートと呼ばれる若者を大量発生させている。世代論的には、いまのところ、彼らの親世代は現役であり経済力もあり、彼らのある部分はそれにパラサイトしているといわれるが、あと 10 年内外で親世代は確実にリタイアする。可能性としても彼らにパラサイト出来る期間は限られている。景気は「気」、「気持ち」だなどという輩がいるが、そんなことはない。現実的にはこうした失業や無業のといった実態が閉塞感を作っているのである。

ところで、このところ、ニッポン放送の株式を巡って、ライブドアとフジ TV の熾烈な競争が話題を呼んでいる。訴訟にまでなっているが、それの判決が如何なるものであれ、ライブドアに理がある。と言っても、その理とは、あくまでも市場経済のルールに則っているということだ。このあたりはおそらく周到に準備されたものであろう。それに対して、ニッポン放送・フジ TV の増資宣言はどう考えてもルール違反というほかない。

こうした状況にあって、ライブドア社長はホリエモンとよばれスターにさえなっている。考えてみれば、芸能人やプロスポーツ人も巨額の収入を得ることもあるが、彼らはやはり「金（カネ）」そのものを目的とすると言う訳けにはいかない。高収入はあくまでも活躍の結果だというだろうし、そういわざるを得ない。ところが、ホリエモンの場合には、収入そのものが目的であると言えるし、事実そのことを実行している。彼の講演会の映像が TV で流れたが、その聴衆の目は彼への羨望に溢れていた。この時代にあって、ホリエモンは「マネーゲーム」＝「金（カネ）」の化身である。

TV や週刊誌によれば、ホリエモンは、自らは IT 企業といっているが、じつはその金儲けの仕方はそうではないらしい。株式の分割による見かけの企業価値の増加を上手く利用したようだ。企業価値とは、発行株式総数に株価を乗じたもの（企業価値＝発行株式総数×株価）であり、たとえば株式を 100 分割すれば、株価は一瞬にして 100 分の１に下

落するはずだが、情報の伝達速度や手続きの処理速度が無限大ではないゆえ、そこにはタイムラグが生じる。つまり、株式の分割によって短期間（経験的には数週間から 1-2 か月くらい）ではあるが、企業価値は増大しているように見えるわけで、この期を巧みに利用して株式の交換という手法によって企業の買収を可能にしていったらしいのである。

一方におけるフリーターの存在と他方のホリエモンの存在は何を意味しているのか。ホリエモンの登場は、この閉塞状況と妙にバランスがとれているようで気持ちが悪い。つまり、彼の存在は、フリーターやニートを自他共に容認するとともに、フリーターやニートを永続化せしめるひとつのモメントになっているようで仕方がない。フジ TV などに対してはホリエモンに理があることはすでに述べたが、それは市場至上主義を更に一歩進めること以上に意味はないのではないか。決して好ましい方向にあるわけではない。断じて…。

最後になったが、本 CD-ROM 作成に際しては、2 年ゼミ生の榎本千夏子くんと本田緑くんには大変お世話になった。HTML 化のほとんど全てを彼女らがやってくれたのである。記して感謝したい。なお、表紙の青空の壁紙は、昨年夏に「FM いずみ」を見学したさい、空があまりに美しかったのでデジカメで撮ったものである。

（2005 年 3 月）